

十二人の怒れる男（12 Angry Men）

観賞日 2024年8月26日 上映時間 96分

【概要】

制作 1957年 アメリカ

監督 シドニー・ルメット

原作・脚本 レジナルド・ローズ

撮影 ボリス・カウフマン

出演 ヘンリー・フォンダ（陪審員8番）、リー・J・コップ（陪審員第3番）

エド・ベグリー（陪審員10番）、E・G・マーシャル（陪審員4番）



【あらすじ】

ニューヨークの裁判所。裁判を担当する12人の陪審員。スラム街に育った18歳の少年が父親を刺殺したとされる裁判。早く評決し解放されたい面々は議論をしないで即、採決するよう進行役の陪審員1番に要求する。結果は有罪11名に対し無罪が1名。陪審員裁判では全員一致が原則だ。唯一無罪とした8番も有罪に納得できないため無罪としたのであり、被告人の人生がかかっていることを考慮して、簡単に決めるべきではないと主張する。しびしび議論に応じた陪審員は各自の意見を表明する。そこから、事件のあらましと同時に陪審員各自の人物像が明らかにされていく。白熱した議論の中から、有罪の根拠とされていた証拠が次々と覆されていき、決を採るたびに無罪を主張する者が増えていく。最後は、強硬に有罪を主張していた3番が翻意して全員が無罪に収斂して・・・。

社会派シドニー・ルメットの監督デビュー作。法廷物の代表作。

【解説】

■ポイント

●アメリカの陪審員制度

アメリカでは一般市民の中から12人の陪審員が選ばれ、陪審員だけで有罪か無罪かの評決がなされる。評決は陪審員の全員一致とされる。

●「疑わしきは罰せず」という刑法の大原則

本作では無罪が証明されたわけではない。有罪と確信することができなくなっただけである。従って、被告人が罪を犯した可能性もある。

●制作経緯

1954年：テレビドラマ、1955年：舞台劇、1957年：映画化（本作）

●受賞（1958年第30回ベルリン国際映画賞）

金熊賞

■見どころ

●12人の陪審員の明確な人物設定と陪審員裁判の問題点を浮き彫りにする

公平性の観点から陪審員の名前が公表されずに番号で呼ばれる裁判

それ故に、評決が無責任に流れる可能性もある

本作では各自の人物設定が明確にされ各自の見解の背景がわかりやすく説明されている

●低予算

制作当時、1億円程度の制作費でこれだけの内容の映画ができることは驚き

シナリオの良さと俳優陣の演技力だけで1時間半で完結する完成度の高い密室劇